

巻 頭 言

教員の長時間労働が問題になって久しい。文部科学省が3年前に行った調査では、残業が月80時間を超える教員が小学校で3割に上ったという。現場からは「子どものことを考えるとどうしても削れないことがたくさんある」という声がある一方で、「授業の教材準備にかかる時間が充分にとれない」という深刻な悩みも聞こえてくる。教師にとって授業は「命」であり、その成否の鍵を握るのが「教材の選択」であると思うが、それがままならない厳しい現実がある。

教材の選択がいかに重要かで思い出されるのは、昭和30年代から50年代にかけてリコーダー指導で優れた教育実践を展開した柳生力氏の仕事である。当時、大阪吹田市の小学校教員であった柳生氏は、学校現場で使用されるタンバリンや大太鼓の音質に不満をもっていた。オーケストラで用いられる楽器とあまりに差があったのと、「子どもにはこの程度で良い」という楽器会社を含めた大人の妥協が許せなかったのである。唯一、可能性を見出したのはリコーダーで、この楽器の歴史上のレパートリーであるルネサンス、バロック、現代音楽のさまざまな楽曲を直接子どもたちにぶつけてみることにした。つまり、リコーダー本来の「鳴り」が体験できる教材を与えたのである。すると子どもたちは夢中で楽器の虜になり、驚くべき集中力と感受性をもって音楽を演奏するようになった。やがてその質の高さが評判を呼び、柳生氏の実践は全国に知られるようになった。子どもたちの演奏がいくつかCDに残されているが、今聴いてもその音楽性の高さに感動する。最年少は小学2年生。しかも、指導は通常の音楽の授業で行われただけであった。柳生氏は「一つの楽器を選ぶことは、一つの音楽を選ぶことである」という信念を教材選択の根拠にしていた。「楽器と楽曲が同じ様式的基盤に立つことによって、かつて遊ばれたものが遊びをもたらし、音楽で夢中になれる子どもを導いてくる」からである。氏はそれを「楽器自体、楽曲自体の指導力」と呼んでいた。

柳生氏の実践は我々にさまざまなことを考えさせる。まず現状に対する鋭い問題意識をもつこと。妥協せず、解決策を考えること。具体的に何を取り上げるかという認知と判断力。取り上げた教材について徹底的に調べ上げ理解しようとする情熱。そして、それらの行動の全てが、「どうしてもやってみたい対象を自分自身が見出し、無心と夢中の虜になる」子どもの学びの実現に繋がっていること。教師の仕事とは本来、このような自発性と創造性に満ちたものであろう。そして、複雑で多様な実践状況が並行する今日の教育現場で求められるのも、主体的に授業を構築し展開できる創造的な能力であると思う。

元号が「令和」に改まり、新しい時代がスタートした。21世紀に入って先進諸国が大胆な教育施策を押し進める中、日本でもさらなる教育改革の兆しが見られる。どのような教員を養成していくのか、我々の模索はこれからも続く。 (初等教育学科長 永岡 都)

参考文献 柳生力・山田隆『からだと音』(2006)、柳生力『仕組みれた学習の罫』(2006)